

健康文化

ラオスの思い出

澤田 清子

ラオスは私が初めて訪れた外国である。外務省から東南アジア諸国に在住する邦人の健康相談を行うよう委嘱を受け、2人の医師と共に成田を出発したのは昭和48年8月3日のことであった。

香港から乗ったロイヤル・エア・ラオは飛行機という代物ではなかった。約30人乗りの、荷物混載の双発機であった。とんぼの翅の様に翼を震わせながら、喘ぎ喘ぎ海上を西へ向かった。何時間も何時間も飛んだ様な気がして、本当にラオスに行けるのだろうか、という不安と苛立ちの3時間余りが経過した頃、やっと陸上へでた。

飛行機の高度が下がるにつれて、田畑の中に点々と椰子の集落があり、その中に、民家らしい小屋と、黄金に輝く寺院の屋根が見えかくれした。これが絵にみた東南アジアの農村風景だと強く感動し、胸を踊らせた。

飛行機は砂塵を挙げて、運動場かと間違われそうなみすばらしいビエンチャン国際空港に着陸した。大使館の職員と青年海外協力隊の関係者のお出迎えを受け、宿舎へ案内された。

ホテルは“アポロホテル”と言う、名前だけは近代的なものであったが、設備は他の途上国のホテル同様にお粗末なものであった。ラオスには“トッケイ”と呼ばれる“やもり”のような動物が沢山いるとのことであったが、私たちの部屋も例外ではなかった。“とっけい、とっけい”とかわいい声で鳴く愛らしい動物で、幸福をもたらすと言われ大事にされているらしい。ただ、壁を伝って天井に張り付いているのが、時々誤ってベッドの上に落下することがある。もし、顔の上にも落ちたらと考えるとぞっとして、おちおち眠れなかった。しかし、旅の疲れでいつの間にか深い眠りに陥った。

翌朝はまだ暗いうちに街に出た。すると、黄色の衣をまとった裸足の托鉢僧の列に出くわした。各家から主婦が出て、恭しく寄進の食物を僧のもっている鉢に入れる。双方は両手を合わせ礼をして、次の家に移る。後刻、ある寺を見物したとき、全僧侶がこのお供え物を互いに分けあって朝食をとっているのを見た。ラオス人は仏教を信仰する敬虔な国民で、男は一生に一度は、僧侶の生

活をしなければならないとされている。これはタイでも同様である。町の中には、いたるところに寺院や仏塔が建てられており、大きな寺院では黄衣をまとった若い僧が寄宿して、讀経や修行に専念している姿が見られた。僧は身分が高く、バスなどに乗ったときには席を譲られ、女子は僧の隣に坐ることが出来ないことになっているそうである。

私たちは本務の間を利用して町の中を見物した。ビエンチャン市の中心部にはパリーの凱旋門に似た大きな建物があり、櫓上から見る市街は素晴らしかった。椰子の林の中に点在する黄金に輝く寺院や仏塔……日頃、緑の乏しい都市の建物の間で暮らしている私にとってはまるで夢のようで、自然に取り囲まれたラオスの人々の生活が羨ましかった。

毎朝、町では朝市（タラサオ）が開かれる。少なくとも1町4方もある屋根付きの大市場ではあるが囲いはない。ここでは、肉、魚、野菜、雑穀など、彼らの日用品はなんでもまかなえる。市場の中は異様な臭いと雰囲気に包まれているが、活発な取引が行われている。鶏、猿、蛇、鼠……中には南米産のアルマジロや大きな“ごきぶり”の様な昆虫まで並んでいる。豚の頭が1列に並べられていたのには珍しさを乗り越して気味が悪かった。驚いたことには彼らの取引はラオス語とフランス語であった。長い間、植民地であったから当然かも知れない。

発展途上国の例にもれず、ラオスの生活環境の整備はよくなかった。特に下水らしいものは無く、雨期にはしばしば汚水が道路にあふれる状態である。浸水を避けるため、高床式住宅が椰子の林の中に点々と立てられているのはエキゾチックで、南方に来たという感を強くした。ビエンチャン市にはわが国の援助で水道が敷設されているが、市外では水道はなく雨水や自家の井戸が使われている。ビエンチャン市内でも、日本大使館、青年海外協力隊事務所、私たちが宿泊したホテルの水道水を検査したところ、アンモニア性窒素、亜硝酸性窒素などは陰性であったが、遊離残留塩素はまったく検出されず、塩素消毒は実施されていないようである。当地へ来た日本人のほとんどが到着後間もなく下痢に罹患すると言われているが、その原因の一つは水道水の過信によるものと考えられた。これは私たちが巡回した他の国々でも同様な現象であった。

ビエンチャンの町でも周辺は一面の耕地で、稲作が主である。動力は水牛で、子供が上手に背中に乗り牛を操り、長閑な農村の風景であった。しかし、子供も5-6歳になると一人前に家畜の管理から家事万端を手伝っているのには感心すると共に、その過酷な労働に同情せざるを得なかった。ラオスの人は人懐

っこく、見知らぬ私たちにも“サワディー”とにこやかに挨拶をする。

ビエンチャンはメコン河岸の町で、対岸はタイ国である。ビエンチャンとタイのノンカイの間には渡し船が往来しており、両国間の交易の重要地点となっている（現在は、友好の橋が完成し、両国は頻繁に往来できる）。メコン河岸にあるラオス第一のホテル、ランサンホテルから見る夕日は素晴らしく、マニラ湾の夕日と並んで世界3大夕日の1つであると聞いた。対岸の椰子の林に沈む夕日はなんともいえぬロマンチックで、6日間の滞在中3回も訪れてシャッターチャンスは何時間も待った。後日、マニラ湾の夕日を見たが、共に忘れ得ぬ思い出となっている。

日頃の喧噪の中で揉まれてきた私にとっては、この牧歌的な、静かで、國全体が深い信仰に生きている穏やかな國、ラオスは私を虜にした。来年も来たい、再来年も来たいと願いつつ、ビエンチャンを後にした。しかし、幸いなことに、私の願いはかなえられ、外務省より昭和52年まで毎年と、その間に学生を連れた研修を3回、計8回ラオスを訪れることが出来た。これは、なにかラオスとの間に目に見えない絆によって結ばれているように感じられた。

私は、予てより、国際交流、国際保健に深い関心をもっており、かつて新潟大学医学部在職中から、関心のある学生を中心に、国際研究会を結成し海外研修を行ってきた。しかも同じ地域を継続的に訪問し、現地の人々との交流を深めることに意義があると考えている。外務省の在外邦人健康相談でも、5年にわたり東南アジア担当を希望したのである。

その後もしばらくは、ラオスも穏やかな心休まる國であった。しかし、次第に政情が悪化し、不穏なポスターや掲示板が街の至るところにみられるようになった。次第に人々の心の落ち着きもなくなった。政治に関する話題は禁句となり、店を閉じるもの、国外に脱出するものが現れだした。政府の要人がパテトラオに拉致されて、北方の砂漠地帯につれ去られ何年も消息は不明で、おそらく殺害されたのではないかとの噂があちこちで聞かれた。在留邦人、商社の人々の中には引き上げを考える人も出始めた。

昭和50年の、大使館での健康相談の際、ある女子職員から涙ながらに訴えられた。その人の主人はラオス人で、二人の間には男の子2名と、女の子1名いる。主人は、実兄の密告により数年前にパテトラオに拉致され、未だに音信不通で、生死の程もわからない。2人の息子は近いうちに日本の姉の所に引き取ってもらおうつもりである。その子供たちの生活費の足しにと、それぞれの名

前の入った純金のブレスレットを持たせたいが、出国の際の検査が厳重で貴金属は没収される。先生方は日本の公用旅券であるので検査は殆ど行われない。何とか日本の姉に届けて貰えないかとのことであった。日本人としては彼女の願いをかなえてあげたい。しかし、どこに隠したら見つけれずに無事通関できるだろうか悩んだが、結局、団長のS先生にお願いすることにした。先生は下腹部に布で包んで隠すことにした。通関の時は生きた心地がしなかったとのことであった。飛行機が離陸した瞬間、一同ほっとして安堵の胸をなでおろした。先生も金属の金は重かったと冗談が言えるようになった。ブレスレットは帰国後、無事に先方に渡すことができ、重責を果たすことが出来た。今では2人の子供も日本で、立派に成人して働いていることでしょう。

私たちの海外研修の目的の1つは、現地の人との親睦である。昭和51年の研修に際しては、学生を現地人のお宅に泊めて頂いた。非常に親切にお世話頂いたことを感謝している。いよいよお別れの日になった。家族が座敷に祭壇を作り、一同が元気に無事帰国できるよう祈禱をしてくれた。更に、手首に糸を幾重にも巻き、このお守りは無事帰宅するまでは解いてはいけないと強く言われた。空港には家族全員が見送りに来てくれ、涙を流して別れを惜しんだ。わずか数日間の滞在であったが、何の関係もない私たちに対して、このような優しい心で接してくれる人たちが他にもいるだろうか。発展途上国、貧しい国と考えられている国、ラオスの人々の心の優しさは生涯忘れられない思い出となった。

私たちは昭和48年から52年にかけてラオスを訪れた。その間にたまたま、恐ろしい政変の惨状をかいまみることになった。密告、幽閉、拉致、処刑、歴史的施設の破壊、血で血を洗うとはこの事かと思われる惨状に、人々の心はすさみ、互いに懐疑心を抱きあい、明日の命も知れぬ不安におののいた生活が続いたであろう。今は国情も落ち着きを取り戻したと思われるが、果して人々の心は元の純朴な心に戻り得たであろうか。もう一度ラオスを訪ねてみたい。あのときの人々に会ってみたいと思う。ラオス人と比べて、日本人の生活の有難さをしみじみ感じるこの頃である。

(愛知みずほ大学健康科学部教授)